

特定非営利活動法人ミーネット

独立行政法人福祉医療機構 平成 26 年度社会福祉振興助成事業  
高齢がん患者の在宅移行ピアサポート事業

## がん体験者によるピアサポートに関するアンケート調査

# 報告書

平成 27 年 3 月 31 日

1. 調査概要	1
2. 調査結果・考察	3
1) 回答者の属性	3
2) ピアサポート関連	4
3) がんの相談全般	7
3. まとめ	10

[別表]

がん体験者によるピアサポートに関するアンケート集計結果

## 1. 調査概要

### 1) 調査目的

がん患者やその家族へのより良い支援体制を構築するために、ピアサポートの現状をアンケートにより把握する。得られた結果を参考にして、講習会等の実践活動に反映させる。

### 2) 調査対象

これまでにNPO法人ミーネットのピアサポートを利用した患者および家族400名（医療機関における院内ピアサポートは含まない）と、医療機関において実施期間内に院内ピアサポートを利用した以下の5施設に通院している患者および家族81名

<調査実施協力医療機関>

名古屋記念病院、愛知県がんセンター中央病院、名古屋医療センター、一宮市立市民病院、  
名古屋市立西部医療センター

### 3) 調査方法

これまでにNPO法人ミーネットのピアサポートを利用した患者および家族400名にはアンケート用紙を郵送し、院内ピアサポートを利用した患者および家族81名にはピアサポーターが対象者に直接配布した。アンケート調査は、無記名自記式調査用紙で行った。アンケートへの協力依頼は「アンケート実施に関する説明文書及び同意書」を用いて行い、同意する場合は「同意書」に記名し、アンケート用紙とは別の返信用封筒で返送することにした。尚、アンケート用紙は同意書が完備（アンケート用紙の投函確認欄にチェック）していない場合は集計対象外とした。

### 4) 調査項目

#### (1) 基礎項目

回答者の立場、性別、年齢、がんと診断されてからの期間、現在の治療状況

#### (2) ピアサポート関連

がんのピアサポーターの存在、相談回数、相談内容、相談の満足度

#### (3) がんの相談全般

がんと診断されてからの悩み、がんの治療後の生活、がんの悩みの相談相手、病院の相談窓口の利用状況、ピアサポートの必要性の有無、ピアサポートの充実に必要なこと、ピアサポーターの教育内容

回答は選択肢と自由記述の記入とした。

### 5) 調査期間

2014年12月18日～2015年2月28日

6) 倫理的配慮

本調査の目的、方法、個人情報の保護などを説明し、書面で調査協力の同意を得たうえで実施した。なお、実施にあたり NPO 法人健康情報処理センターあいち倫理委員会の承認（承認No.UMIN000015813）を受けた。

7) 回収率

有効回答数 127 例（回収率 26.4%）であった。同意書に記入漏れのあったアンケート 14 例は集計対象外とした。

8) 調査者

NPO 法人ミーネット 理事長 杉浦美紀

9) 調査報告者

豊橋創造大学保健医療学部 大野裕美

## 2. 調査結果・考察

### 1) 回答者の属性

図1 回答者と患者さんの性別

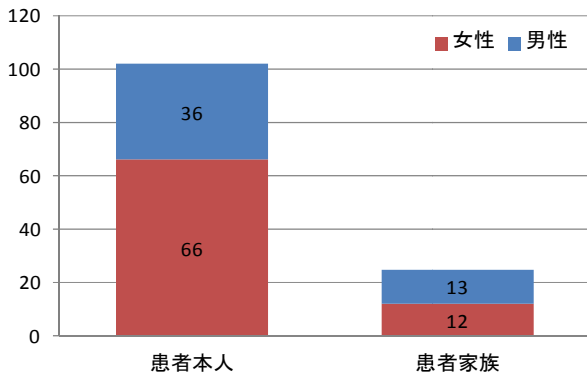


図2. 患者さんの年齢

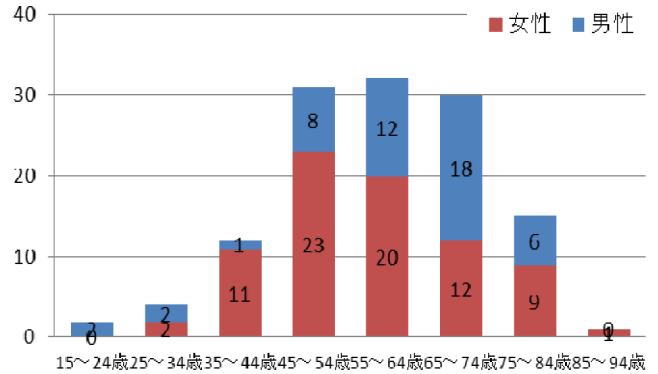


図3. がんと診断されてからの期間

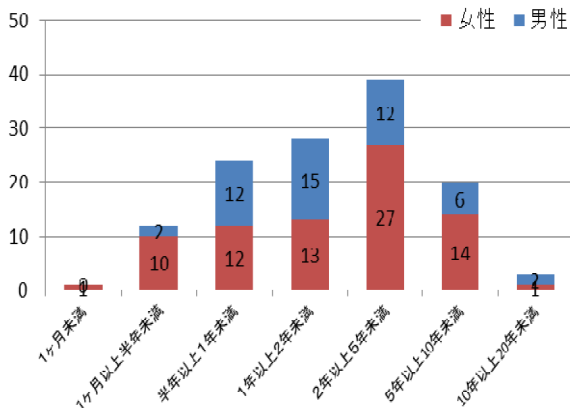
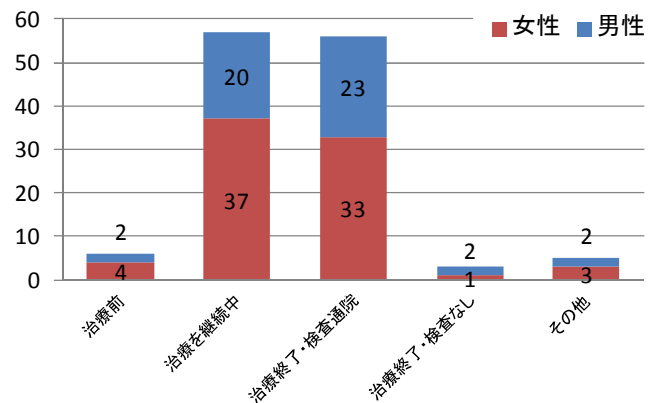


図4 現在の状況

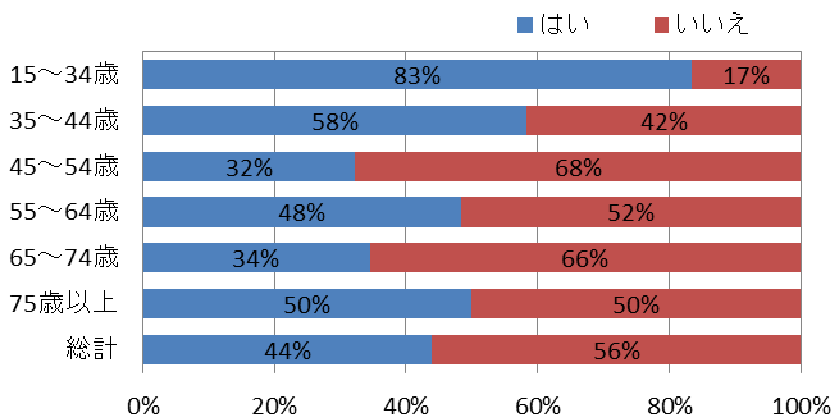


### <回答者属性の概要と考察>

回答者は患者本人が85%であった。患者の年齢は男女比が見られ、女性は45～54歳が29%と最も多く、次いで55～64歳が26%、65～74歳が15%、35～44歳が14%と続いた。一方、男性は65～74歳が37%と最も多く、次いで55～64歳が25%、45～54歳が16%、75～84歳が12%であり、がん罹患年齢の疫学統計と重なった。がんと診断されてからの期間は2年以上5年未満が最も多く、男女ともに治療継続中、もしくは治療終了後の検査通院が多かった。

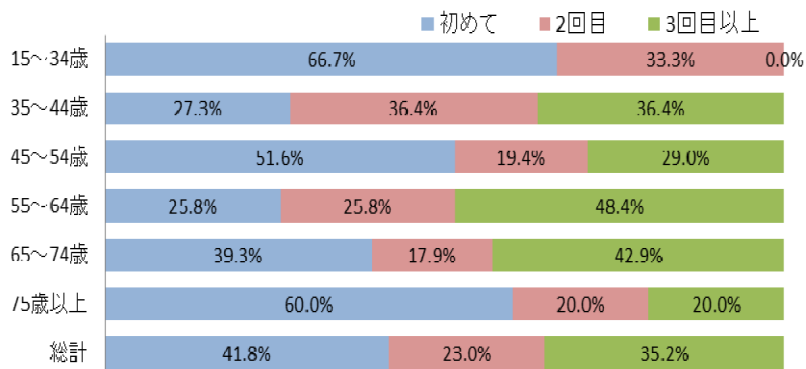
## 2) ピアサポート関連

図5. ピアサポーターを知っていたか・年代別



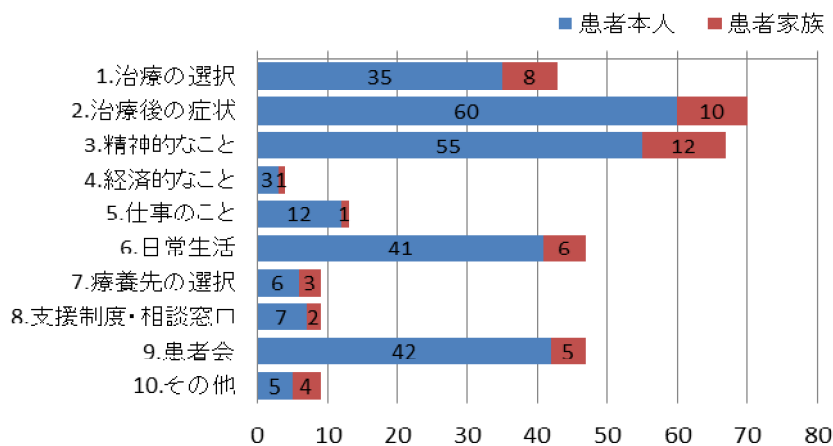
総数では、ピアサポーターの存在を知っていた人は45%、知らなかった人は55%であった。

図6. 相談回数 年代別



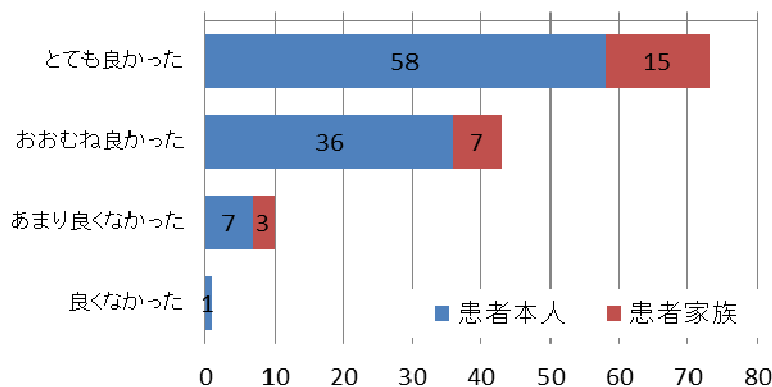
総数では初めて相談する人が44%で、3回目以上の人が34%とリピーターも多く、なかでも、35～44歳と55～64歳のリピート率が高かった。

図7. 相談内容



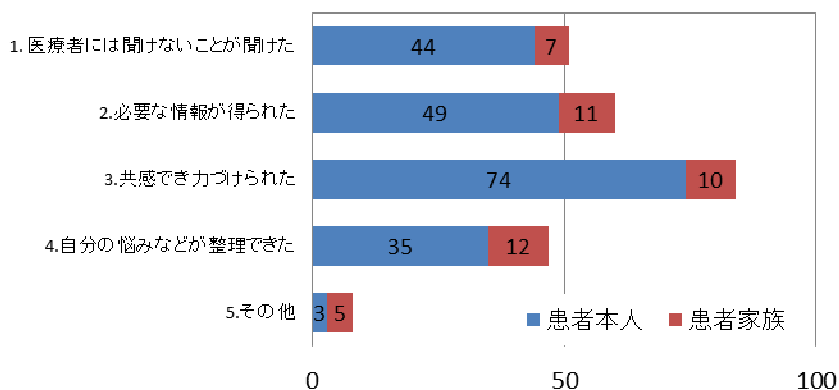
相談で多いのは、治療に関する事、精神的なこと、日常生活のこと、患者会についてであった。その他として、世間話、免疫療法、後遺症、緩和ケアセンターの予約について等があった。

図8. ピアサポートの満足度



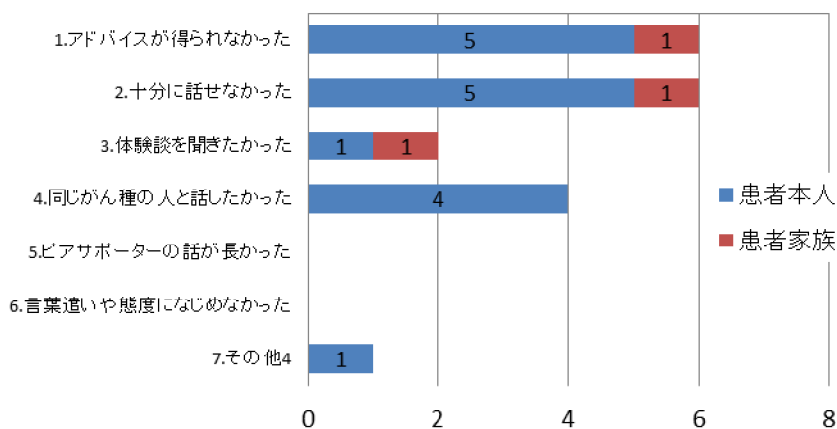
91%の人がピアサポートに満足していた。

図9. 良かったと思う理由



良かったと思うその他の理由は、「自分よりも深刻な状況のピアサポーターがいきいきと活動している姿をみて勇気が得られた」、「退院後、病院の相談窓口は敷居が高かったが、ピアサポーターに出会って意識が変わり立ち寄りやすくなった」、「安心して話を聴いてもらえる存在があるということが嬉しい」等であった。

図10. 良くなかった理由



良くなかった理由の記述に、「同じ臓器でも治療法が違うので、期待したアドバイスが得られなかった」、「自分自身の気持ちの整理がついていなかったので思いを表現できなかった」、「体験者ならではの力強い話が聞きたかった」等があった。

## <ピアサポート関連の概要と考察>

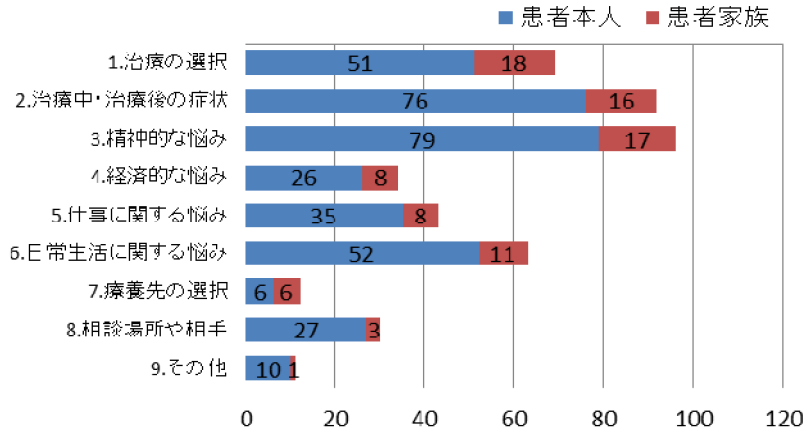
まず、ピアサポーターの認知度は45%と、一般にも少しずつ浸透してきたように思われる。ピアサポート3回目以上は34%であり、リピーターも多いことが示された。なかでも35～44歳と55～64歳のリピート率が高かった。両者は就労世代であり、がん罹患後の生活構築の問題が根底にあるのではないかと考えられる。

次に、ピアサポーターへの相談で多いのは順に治療に関すること、精神的なこと、日常生活のこと、患者会についてであり、その他として、世間話、免疫療法、後遺症、緩和ケアセンターの予約について等があった。また、91%の人がピアサポートに満足していたことが明らかになり、ピアサポートのリピート率と併せると、ピアサポートの必要性が示されたといえる。なお、ピアサポートを受けて良かった理由の上位3つは、「共感でき力づけられた」、「必要な情報が得られた」、「医療者には聞けないことが聞けた」であり、良くなかった理由の上位3つは「アドバイスが得られなかった」、「十分に話せなかった」、「同じがん種の人と話したかった」であった。良かった理由のその他は、「自分よりも深刻な状況のピアサポーターがいきいきと活動している姿をみて勇気が得られた」、「退院後、病院の相談窓口は敷居が高かったが、ピアサポーターに出会って、意識が変わり、立ち寄りやすくなった」、「安心して話を聴いてもらえる存在があるということが嬉しい」等であった。ピアサポーターが、がん罹患後の生き方のロールモデルとなっているのかもしれない。

これらのことから、ピアサポーターに求められることは、相談者のがん治療に関するプロセスにおいて自らの療養体験に基づいて寄り添い、必要な情報提供を行うことであった。また、ピアサポーターの生きる姿勢そのものが、患者にポジティブな要素として働いていることが示された。

### 3) がんの相談全般

図11.がん治療における悩み



がんの相談はピアサポーターへの相談内容と同様に、治療に関すること、精神的なこと、日常生活のことが上位であり、次いで仕事、経済、相談場所等が挙げられた。

図12.治療における悩み 年代別

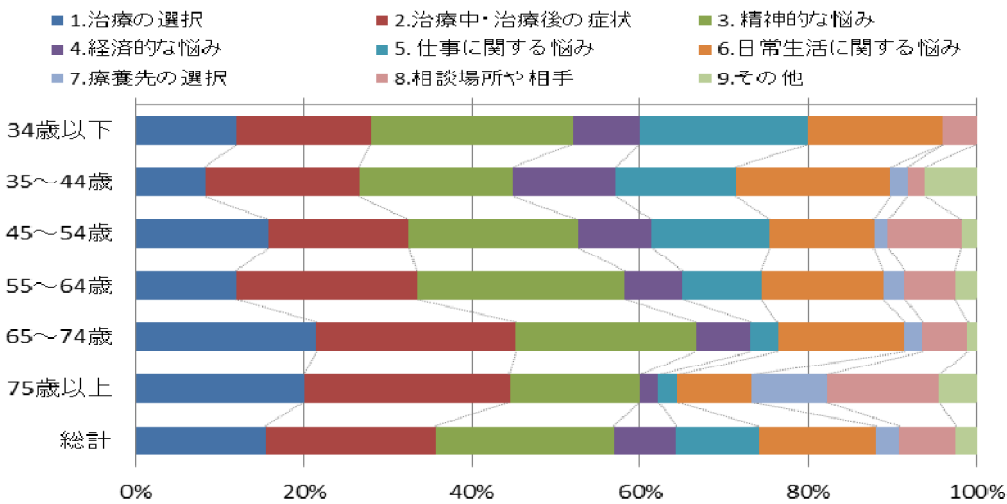


図13.治療後の生活に関する悩み

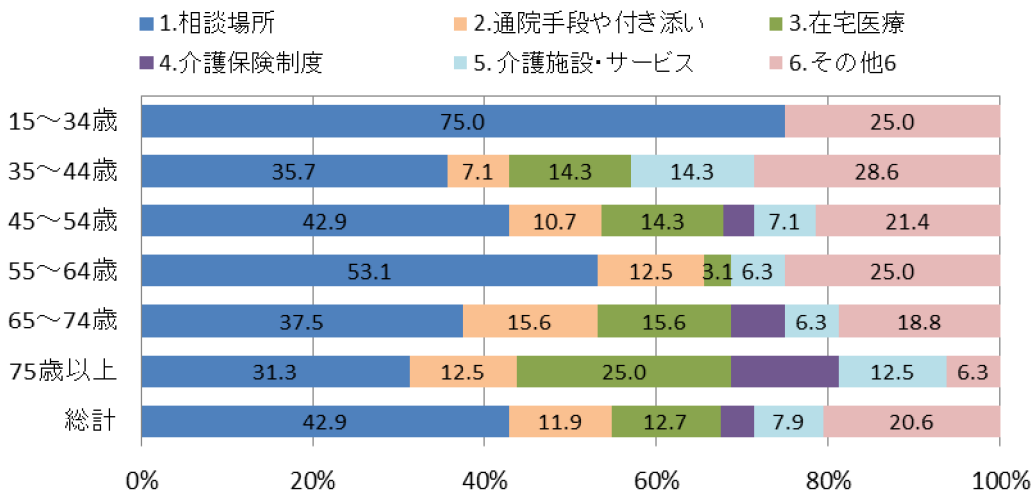
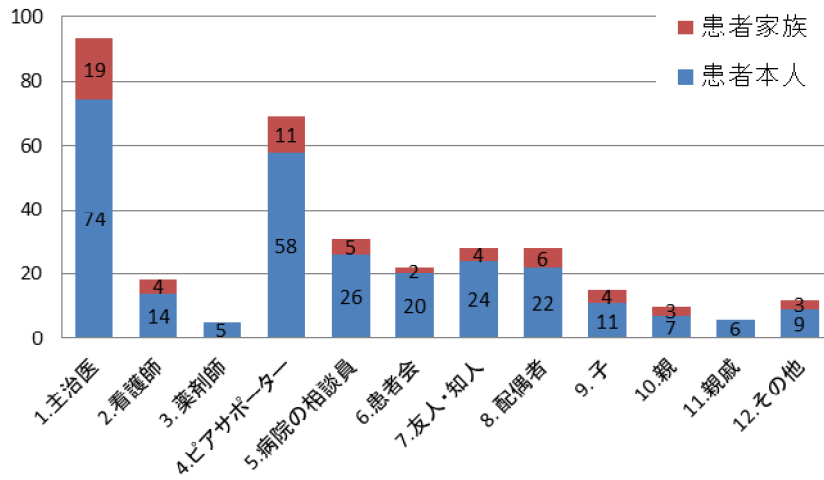


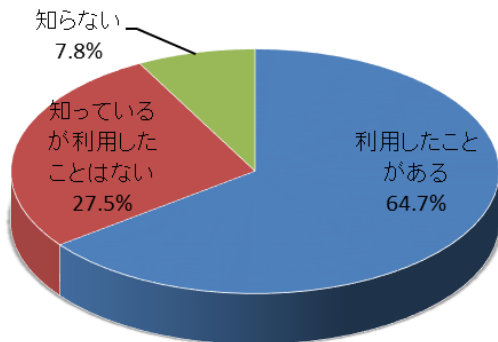


図14.相談相手



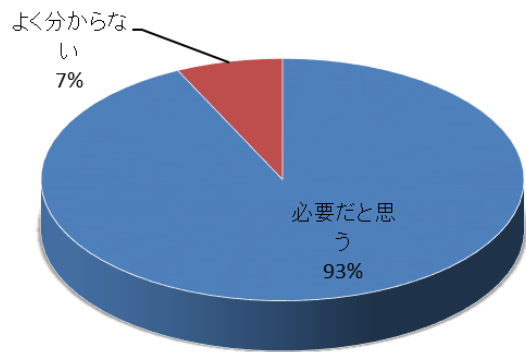
相談相手は、主治医に次いでピアサポーターであった。

図15.がん相談窓口の利用



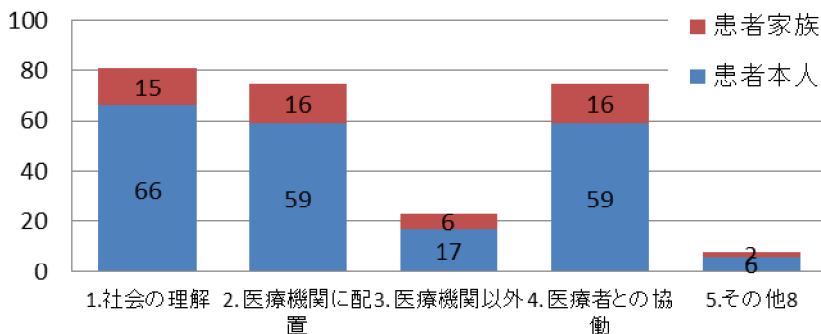
がん相談窓口の利用者は約 65%であった。

図16.ピアサポートは必要か



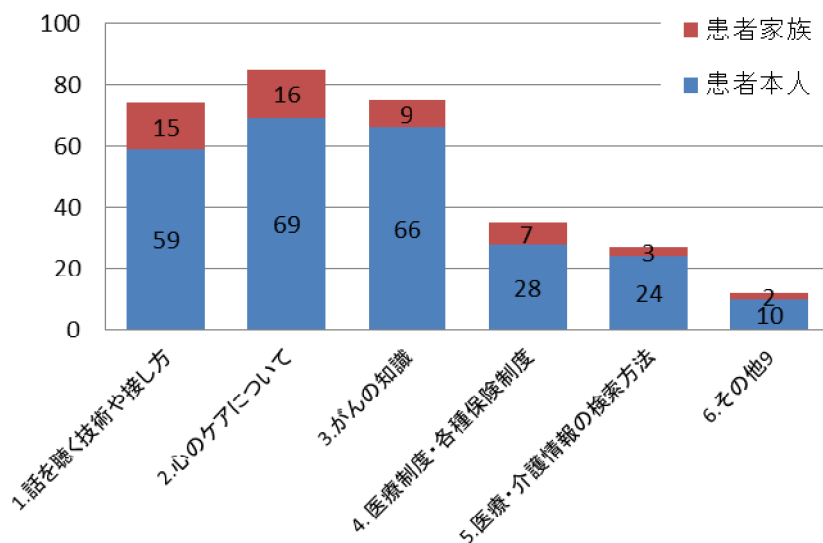
ピアサポートが必要だと思うのは 93%であった。

図17.ピアサポートの充実に必要なこと



ピアサポートの充実に必要なことは、社会の理解、医療機関にピアサポーターの配置、医療者との協働がほぼ同数であった。

図18.ピアサポーターが学ぶべきこと



### <がんの相談全般の概要と考察>

まず、がん治療における悩みとピアサポーターへの相談内容とが合致していたことから、今後、仕事、経済、相談場所等についてもピアサポーターへの相談が増加することが予測される。また、治療後の悩みとして、相談する場所、在宅医療など療養生活に関連した悩みも示されていることから、ピアサポーターが在宅医療や社会保障制度についても相談を受けられることがあると思われる。

次に、がんの相談相手として主治医に次いでピアサポーターが示されたことから、ますますピアサポーターに対する需要が高まると考えられる。しかし、ピアサポートの充実に必要なこととして社会の理解が必要であることが示されており、需要に呼応できる社会整備は不十分だといえる。医療者との協働を支えるピアサポートの構築を社会に向けて発信していくことが必要である。

そして、ピアサポーターが学ぶ内容として接遇技術、心のケア、がんの知識のほかに医療制度や各種保険制度、医療・介護情報の検索方法等が示された。その他、患者がもう質問することがありませんというところまで相手になってくれる忍耐力、〇〇〇のことの検証等、多岐にわたるピアサポーターへのニーズが明らかになった。今後、どこまでの範疇をピアサポーターが関与していくのか検討する必要がある。

### 3. まとめ

今回の調査は、回答者の85%が患者本人であったことから、当事者であるがん患者のニーズがアンケートに映し出されたものとなっている。近年、就労世代のがん患者人口の増加により、がん患者が抱える問題とその支援がクローズアップされているが、本調査でも基本項目による患者の年齢の男女比から、女性は45～54歳(29%)、男性は65～74歳(37%)と、就労世代の回答者が多かった。以下、得られた結果から、本調査の目的であるがん患者やその家族へのより良い支援体制を構築するための考察を、ピアサポートとがん相談全般の2つの視点から行っていく。

まず、ピアサポート関連についてであるが、ピアサポーターの認知度が45%であることから、社会的な認知度が高くなってきたことが示された。リピート率もピアサポート3回目以上が34%、なかでも35～44歳と55～64歳のリピート率が高かったことは、就労世代が抱えるがんに伴う問題が関係していると考えられた。ピアサポーターへの相談で多いのは順に治療に関すること、精神的なこと、日常生活のこと、患者会についてであり、その他として、世間話、免疫療法、後遺症、緩和ケアセンターの予約について等があった。今回、91%がピアサポートに満足していると回答しており、ピアサポートのリピート率とも併せると、ピアサポートの必要性は高いといえる。

なお、ピアサポートを受けて良かった理由の上位3つは、「共感でき力づけられた」、「必要な情報が得られた」、「医療者には聞けないことが聞けた」であり、良くなかった理由の上位3つは「アドバイスが得られなかった」、「十分に話せなかった」、「同じがん種の人と話したかった」であった。良かった理由のその他として、「自分よりも深刻な状況のピアサポーターがいきいきと活動している姿をみて勇気が得られた」、「退院後、病院の相談窓口は敷居が高かったが、ピアサポーターに出会って、意識が変わり、立ち寄りやすくなった」、「安心して話を聴いてもらえる存在があるということが嬉しい」等があった。また、ピアサポーターに求められることは、相談者のがん治療に関するプロセスにおいて自らの療養体験に基づいて寄り添い必要な情報提供を行うことであった。ピアサポーターの生きる姿勢そのものが、患者にポジティブな要素として働き、がん罹患後の生き方のロールモデルとなっていると思われる。

次に、がん相談全般についてであるが、がん治療における悩みとピアサポーターへの相談内容が合致していたことから、今後、仕事、経済、相談場所等についての相談の増加が予測される。また、治療後の悩みとして、相談する場所、在宅医療など療養生活に関連した悩みも示されていた。これらの悩みについても、今後、ピアサポーターが相談を受けることがあると思われる。

今回の調査結果で、がんの相談相手として主治医に次いでピアサポーターが示されたことから、今後、ますますピアサポーターに対する需要が高まっていくだろう。だが、ピアサポートの充実に必要なこととして社会の理解が必要であることが示されたように、現状では需要に呼応できる社会整備が進んでいるとはいえない。医療者との協働体制を構築していけるように広く社会に向けて発信していくことが望まれる。

と同時に、どこまでピアサポーターが関与するのか検討していく必要がある。ピアサポーターが学ぶ内容として接遇技術、心のケア、がんの知識のほかに医療制度や各種保険制度、医療・介護情報の

検索方法等が示されただけでなく、患者がもう質問することがありませんというところまで相手になってくれる忍耐力、〇〇〇のことの検証等、多岐にわたるピアサポーターへのニーズが明らかになった。なぜ、そこまで多岐にわたる要望を患者はピアサポーターに抱くのであろうか。それは、がん患者にとってそれだけピアサポーターが頼れる身近な存在であるという証であるだけでなく、がん患者の悩みや相談を既存の専門機関であるがん相談支援室をはじめ公的ながん相談が、患者のニーズに応えきれていないという証でもあろう。

現在、国の指針によってがん診療連携拠点病院要件の見直しも含め、がん相談のありかたが再考されている。そのような状況下において、「つなぐ」をキーワードのひとつとして活動するピアサポーターの役割とその活動範囲を見直し、医療機関とどのように連携していくべきかその協働のありかたが今後、問われていくものであると考えられる。

#### <今後の課題>

- がんと診断されたときからのピアサポート
- ピアサポートの限界設定（活動内容整理）
- ニーズを活かしたピアサポート研修
- ピアサポート充実のための社会整備